

学 位 論 文 題 名

要介護高齢者と介護職員の脱アサイラム研究

—特養ホームにおける介護自治文化の形成過程のフィールドワーク—

学位論文内容の要旨

本論文は、特養ホームに入所する要介護高齢者と、そこで働く介護職員に焦点を当てて、「措置から契約へ」あるいは「収容の場から生活の場へ」と大きく社会変動をむかえる福祉の介護現場でいま起きつつある事実を〈21世紀型介護自治文化〉としてまとめた成果である。

本研究のテーマは、第一に、要介護高齢者のエンリッチ・エイジングの理論と実態を明らかにすることである。エンリッチ・エイジングとは、たとえマヒや痴呆になったとしても、自己決定や自己表現によって尊厳をもってむかえられる豊かな老いを意味する。

第二のテーマとしては、三つの異なるタイプの特養ホームで働く介護職員の〈介護自治文化〉の形成過程を、高齢者福祉政策の歴史的経緯、施設の経営方針と地域性、労働関係、労働環境といった諸観点から、それぞれ比較しながら実証的にその労働過程が研究された。

第三は、第一の要介護高齢者の生活過程と第二の介護職員の労働過程という両過程を見据えて、特養ホーム全体が、〈流れ作業的介護〉や〈ベルトコンベア式介護〉から脱却し、〈脱アサイラム化〉もしくは〈脱施設化〉してゆく過程が考究された。

その研究方法は、質的調査におけるフィールドワークの手法である。具体的には個人面接法や集団面接法を主軸として、補足的にアンケート調査が実施されている。鹿児島都市圏、奄美離島圏、そして札幌大都市圏の三地域における特養ホームに入所する要介護高齢者と、そこで働く介護職員にフィールドワークが行なわれた。

全篇を通して本研究では、調査対象の特養ホームがアサイラムであるという立場が採用され、その前提として、ゴッフマンのアサイラム研究が詳細に検討された。これはゴッフマンが精神病棟のフィールドワークによって理論化した学問知であり、特養ホームを研究対象とする本研究の分析装置としても応用できる可能性に富むと判断されたからである。具体的には、第二章の「アサイラムとしての特養」において、被収容者と職員の「根源的裂け目」、被収容者の「自己の無

力化」、「第二次的調整」が特に検討された。さらに、ゴッフマンの成果を敷衍させた本論文独自の分析概念である“第三次的調整”や、つかず離れずの“微妙な関係”が提案された。

加えて、施設全体を一体化させ、被収容者と職員のあいだの「根源的避け目」を埋める効果のある、アサイラムにおける儀礼の役割について紹介し、ここから形成される被収容者の生活文化や役割解除についても検討が加えられた。その結果として、ゴッフマン研究から導き出された概念を駆使して、特養ホームにおける〈エンリッチ・エイジング〉と〈介護自治文化〉を分析するための概念として、「ユニットケア」と〈介護業務構造〉という考え方が打ち出された。介護研究に新しい視点を導入したと評価できる。

これらを受けて第三章「特別養護老人ホーム小史と厚生労働省型介護文化」で介護の歴史が通観され、第四章では実証研究の方法が開示され、第五章「調査対象の特養」では詳しい歴史と現状がまとめられている。

後半の実証分析編では、まず第六章で施設入所者の世界が、アサイラムの生活過程として考察された。第一節では、要介護高齢者のエンリッチ・エイジングと対極にある「自己の無力化」についてその実態が明らかにされ、第二節ではそのような「自己の無力化」を入所者がどのように回避しているか、そのパターンを単独で行なう“第一次的調整”、仲間と結束して行なう“第二次的調整”、そしてつかず離れずの関係形成である“第三次的調整”などが体系的に整理された。このまとめも本論文の個性である。

第七章では、介護職員が理想とする介護サービスとして、ユニットケアの推進、痴呆高齢者ケアの普及、そして介護技術の向上の三点がまとめられた。第三節では、介護職員が労働関係や労働過程において抱える様々な葛藤を論じて、入所者と介護職員のあいだの葛藤、〈措置感覚のケアハビトゥス〉と〈契約感覚のケアハビトゥス〉のあいだの葛藤、〈身体介護業務〉と〈生活支援〉のあいだの葛藤、そして若手介護職員とベテラン介護職員のあいだの葛藤——これらの葛藤は、介護職員に〈介護労働の疎外化〉をもたらす危険性があるとされた。

最後の第八章では、特養ホームにおける〈脱アサイラム化〉と〈介護業務構造〉について検討が加えられた。結論として、入所者の生活過程と介護職員の労働過程が結びつけられ、「根源的裂け目」を埋める機能を果たすのは「ユニットケア」であるということが主張された。ユニットケアという少人数の介護を実践することによって、高齢者どうしの「馴染みの関係」や「繋がっている感覚」が形成される。

ゴッフマン研究におけるアサイラム論を病院施設、とりわけ精神病院の研究に応用したものは存在するし、介護施設での実証調査が可能であることを示唆した理論研究もすでにある。しかし、

実際に介護施設において大規模なフィールドワーク調査を実施し、かつゴッフマンのアサイラム研究における分析枠組みとの関連性について、質的データから言及した研究はない。本論文の一番の研究成果は、アサイラム論を特養ホームに入所する要介護高齢者とそこで勤務する介護職員の分析に応用したところにある。その結果、被収容者の「自己の無力化」、職員と被収容者の「根源的裂け目」、自己の無力化を回避するための「第二次的調整」、被収容者の類型化、職員の葛藤、盟友、「身内化過程」、アサイラムにおける儀礼、儀礼による役割解除などが、本論文のなかでも確認され、再定義され、質的データの分析に寄与した。同時に「脱アサイラム化」という概念が鑄造されるという結果ももたらした。

もう一つは従来の要介護高齢者の「自己の無力化」のみが把握されてきた特養ホームの研究で、介護職員のライフスタイルまでも比較研究したことにより確認された職員の「自己の無力化」が、要介護高齢者のそれと表裏一体であったことが判明した点があげられる。つまり、要介護高齢者のエンリッチ・エイジングを追究することは、介護労働の疎外化の超克を追究することと同じであったことが明らかにされたのであり、従来にはなかった知見といってよい。

本委員会では、本論文が、博士（文学）の学位授与に十分にふさわしい学問的価値をもつものであるという点で、全員の意見が一致した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 金 子 勇 (社会システム科学講座)

副 査 教 授 櫻 井 義 秀 (社会システム科学講座)

副 査 教 授 関 孝 敏 (地域システム科学講座)

学 位 論 文 題 名

要介護高齢者と介護職員の脱アサイラム研究

—特養ホームにおける介護自治文化の形成過程のフィールドワーク—

本論文は、特養ホームに入所する要介護高齢者と、そこで働く介護職員に焦点を当てて、「措置から契約へ」あるいは「収容の場から生活の場へ」と大きく社会変動をむかえる福祉の介護現場でいま起きつつある事実を〈21世紀型介護自治文化〉としてまとめた成果である。

その研究方法は、質的調査におけるフィールドワークの手法である。具体的には個人面接法や集団面接法を主軸として、補足的にアンケート調査が実施されている。鹿児島都市圏、奄美離島圏、そして札幌大都市圏の三地域における特養ホームに入所する要介護高齢者と、そこで働く介護職員にフィールドワークが行なわれた。

全体を通して本研究では、調査対象の特養ホームがアサイラムであるという立場が採用され、その前提として、ゴッフマンのアサイラム研究が詳細に検討された。これが本論文の特徴であり、同時に限界ともなっている。理論的には第二章の「アサイラムとしての特養」において、被収容者と職員の「根源的裂け目」、被収容者の「自己の無力化」、「第二次的調整」が特に検討され、ゴッフマンの成果を敷衍させた独自の分析概念である“第三次的調整”や、つかず離れずの“微妙な関係”が提案されている。

加えて、施設全体を一体化させ、被収容者と職員のあいだの「根源的避け目」を埋める効果のある、アサイラムにおける儀礼の役割について紹介し、ここから形成される被収容者の生活文化や役割解除についても検討が加えられた。その結果として、ゴッフマン研究から導き出された概念を駆使して、特養ホームにおける〈エンリッチ・エイジング〉と〈介護自治文化〉を分析するための概念として、「ユニットケア」と〈介護業務構造〉という考え方が打ち出された。介護研究に新しい視点を導入したと評価できる。

本研究がもつ第一の社会学的意義は、エイジング諸理論に対する貢献である。プロダクティブ・エイジング、サクセスフル・エイジング、フレキシブル・エイジングといったエイジングの諸理論を、第一章において検討するなかで、本研究では、高齢者のなかでもとりわけ痴呆高齢者

にとっての尊厳ある老いが、エイジング理論から排除されていることに着目した。このような現況を踏まえて、痴呆高齢者を排除しないで建設的な意味で高齢者をとらえようとする立場から、さまざまな老いの概念を検討した。その結果を、痴呆や麻痺になっても尊重される尊厳ある老い、すなわち〈エンリッチ・エイジング〉がまとめられた。

第二の社会学的意義として挙げたいのは、ゴッフマンのアサイラム研究への学問的貢献である。ゴッフマン研究におけるアサイラム論を病院施設、とりわけ精神病院の研究に応用したものは存在するし、介護施設での調査が可能であることを示唆した理論研究もある。しかしながら、じつさに介護施設において大規模なフィールドワーク調査を実施し、かつゴッフマンのアサイラム研究における分析枠組みとの関連性について、質的データから言及した研究はないので、特養ホームに入所する要介護高齢者とそこで勤務する介護職員の分析にアサイラム論の枠組みが応用されたことは意義深いものがある。この試みによって、被収容者の「自己の無力化」、職員と被収容者の「根源的裂け目」、自己の無力化を回避するための「第二次的調整」、被収容者の類型化、職員の葛藤、盟友、「身内化過程」、アサイラムにおける儀礼などが鮮明に分析できたのであるから。

しかし、本研究が特養という小集団に限定して分析してきたことによって、次のような課題が残されている。まず、介護職員の労働過程を中心に検討されたため、特養以外の場において介護職員が有する生活過程への分析枠組みが手薄になってしまったことが指摘される。第二に、入所者の家族的な事情を分析しきれなかったため、入所者の個人的次元に触れることができなかった。第三に、「自己の無力化」の回避や、介護職員の〈介護労働の疎外化〉の超克によってもたらされる〈エンリッチ・エイジング〉の達成について説明するさい、本論文ではおもに社会関係、とりわけ人間関係から説明されたため、特養ホームが位置する地域社会の構造研究、年金制度、健康保険制度、介護保険制度、日本社会の人口変動などといった社会的背景や社会制度の分析が不十分であった。

さらに三つの特養ホーム調査からだけの一般化には限界があり、通常 of 社会学的分析に留意する要因としての要介護高齢者の健康状態、心理状態、家族構造、職業歴、趣味などといった個人的要因研究面への言及に物足りなさが残る。

とはいえ、それらは全体として本論文の価値を低めることにはならないし、このような比較地域福祉社会学の成果が少ない中では貴重な試みといえる。

以上を総合的に判断し、本委員会では、本論文が、博士（文学）の学位授与に十分にふさわしい学問的価値をもつものであるという点で、全員の意見が一致した。